

第7章 あとがき*

1. 本特別研究の終了に当って

地震予知関係者の強い要望に応え、また多くの期待を担って、地震火山研究部が昭和49年度より開始した海底地震常時観測システムの開発は54年3月に成功裏に完了した。地震火山研究部が主体となり開発を進めたがその内容のほとんどすべてが新しい分野の開拓であり、新たに発生する諸問題を解決しながら次の過程に進むという困難な道程であった。特に本システムの最も重要な部分である海底に布設された後は手を触れることができず、故障修理等のため揚取することも物理的には不可能でないにしても、現実問題としてはそのための欠測、費用、労力等を考慮すると不可能に近い。したがってこれらの装置は「完全」なものを設計、製作する必要がある、このため厳しい試験等を繰返した。それらの試験結果等や布設その他の工事等に関する資料は膨大な量にのぼるが、今後類似のプロジェクトを行うであろう人々のためには必要な参考資料になると考え、研究部にそれらを保存してあるが、その一覧表を巻末の付記に掲げておく。

このようにして完成した本システムは、前章までに述べたように、当初の計画を超える性能をもっている。先端装置と3組の中間点装置の地震計は東海沖のいわゆる地震空白域で発生するマグニチュード2.5以下の地震をも記録しているが、これらの地震は陸上の観測所では捕えられていないものである。本システムは4地点ではあるが、群列方式の観測網を形成しているので、これら地震の震源要素をも決定し得る。現在極めて地震活動度の低いこの海域におけるこのような地震発生の消長を監視することは、地震予知のためにも重要な仕事と考えられる。

現在駿河湾および遠州灘沿岸を中心とし東海地方の各地には、地震、地殻変動、地下水等の観測施設が多数作られている。地震予知はこれら多くの観測結果を総合してなされるのは勿論であるが、今回完成した本システムはこれら諸観測施設の中でも極めて重要な役割を果たすことになるであろう。

2. 謝 辞

海底地震常時観測システムが完成するまでには、直接または間接に多くの方々の御指導と御協力を戴いた。

御指導と御協力を戴いた関係官公庁・地元関係者の方々には、紙面をかりて関係者の所屬を掲載して厚く御礼申し上げます。

* 執筆担当 飯沼龍門

所 属 又 は 社 名	協 力 件 名
郵政省大臣官房電気通信監理室	有線電気通信設備の許可
海上保安庁水路部	海底地形調査
第3管区海上保安本部	布設協力
建設省中部地方建設局	中継所局舎の建設管理
日本電信電話公社本社	システム技術指導・布設工事
電電公社海底線施設事務所	布設工事
電電公社海底線工事事務所	布設工事
国際電信電話KK	付帯設備技術指導
静岡県庁	地元全般的協力
静岡県御前崎土木事務所	県用地借用
御前崎町	町用地借用・地元全般的協力
榛原地区・福田・浜名 各漁業協同組合	漁業関係
電力中央研究所	高圧試験
民地所有者(5名)	管路用地借用

海底地震計開発部会として本プロジェクトの開発の方向に適切な御指導を戴いた方々には、関係職名と氏名を掲載して厚くお礼申し上げます。

- 部 会 長 気象研究所長
- 副部会長 気象庁観測部長
- 部 会 員 総務部企画課長
- 予報部通信参事官・業務課長・有線通信課長
- 観測部参事官・管理課長・測器課長・地震課長
- 海洋気象部海務課長
- 気象研究所企画室長・総務部長

部外の学識経験者委員名と所属

氏 名	職 名	所 属
浅 田 敏	東京大学教授	東京大学理学部地球物理学教室
南 雲 昭三郎	〃	東京大学地震研究所

福 富 秀 雄	} 技術局線路部門 担当調査役	日本電信電話公社
貝 淵 俊 二		"
辻 岡 健	総務部次長	電電公社データ通信本部
石 野 文 雄	"	"
宮 内 幸 治	"	"
茂 木 昭 夫	測量課長	海上保安庁水路部

また、この部会のワーキング・グループの構成員として参画して下さった方々は、付記1のワーキング・グループ構成員の表に掲載しました。厚くお礼申し上げます。

気象庁本庁としては、総務部長および総務課・経理課の課長以下担当者の方々、観測部長・参事官および管理課長・地震課長以下担当者の方々、予報部有線通信課長以下担当者の方々、海洋気象部海務課長および神戸海洋気象台長を始めとする春風丸の方々、又東京管区気象台・静岡地方気象台の台長を始めとする担当者の方々に、特に地元御前崎測候所には所長を始めとする所員の方々にも絶大なる御協力を戴き、心から敬意を表します。

最後に、最も多忙であった52年11月中途急逝された地元御前崎出身である故大沢友栄御前崎測候所前所長にも完成報告を霊前に捧げて、冥福を祈ります。

また所内にあって、気象研究所独自の大事業としてこの5年間組織をあげて取り組み、予算関連業務・部外折衝・実行経理業務に携った多くの方々の御尽力に、紙面をかりて主なる担当者氏名を掲載して心から敬意を表します。

気象研究所長	須 田 建	昭和49～51年度
	杉 浦 次 郎	52年度
	関 原 彊	53年度
企 画 室 長	伊 東 令 慈	昭和49～51年度
	増 田 武	52～53年度
総 務 部 長	岩 田 唯 衛	昭和49～51年度
	吉 水 敏	52年度
	七 里 義 人	53年度
会 計 課 長	関 博	昭和49～51年度
	石 川 一 弘	52～53年度

なお、直接に開発、製作、あるいは工事に当たった業者は何れも本プロジェクトの地震予知における重要性を認識して努力され、その成功の基となる仕事をされた。以下に社名を記し、謝意を表します。

日本電気KKとグループ	海底部装置・陸上テレメータ開発製作
日本大洋海底電線KK	ケーブル製作と陸上布設
河原建設KK	局舎建設工事
菊水設備KK	局舎空調・付帯工事
向笠電機工業KK	管路工事・標柱工事
芙蓉海洋開発KK	沿岸調査
日本海洋建設KK	ケーブル防護工事
藤倉電線KK	海岸アース製作
三菱建設KK	海岸アース工事
新電元工業KK	無停電電源装置製作
東京産業KK	発動発電機製作
昭和製鎖産業KK	ケーブル保護管製作
日本地工KK	局舎アース工事

3. 技術報告書をまとめるにあたって

この報告書は、システムの技術的内容の説明とその開発の過程、これに付随する作業と手続等、更に得られたデータの解析の一部、関係表等について述べ、報告した。今後このようなシステムの開発製作をする関係者の参考となれば幸いである。

巻頭には、小林壽太郎気象研究所長の序文を戴き、以下を地震火山研究部が担当した。

1 章	地震火山研究部長	田 望
3, 4, 7章, 付記	第3研究室長	飯 沼 龍 門
5 章	第3研究室主任研究官	松 本 英 照
2 章	第3研究室研究官	高 橋 道 夫
6 章 (関連研究)	第3研究室主任研究官	松 本 英 照
		各 担 当 者
資料の解析	第3研究室	塚 越 利 光
	第1研究室	吉 田 明 夫
資料の整理		安 藤 喜 代 美

直接執筆は戴けなかったが、当初から御尽力を戴いた諏訪彰前部長，山川宜男前第2研究室長ならびに資料の解析と指導を戴いた磯崎一郎・小泉宗三郎・勝又護・浜田信生・内池浩生・藤沢格の諸氏には心から御礼を申し上げます。